

# 自己を知る

## ——超越者との対話\*

岡野 昌雄

### 神と自己

アウグスティヌスの膨大な著作は、失われた若い頃の『美と適合について』 *De pulchro et apto* を除くと、すべて回心後に書かれたものです。彼の著作活動は、9年に及ぶマニ教との関わりを捨てて、幼いころから母モニカによって培われたキリスト教信仰に復帰し、それを受け入れる決断をした、いわゆるミラノの回心直後に、ミラノ郊外のカッシキアクムに籠って自らの生き方を見つめ直そうとした、自己省察の記録であるカッシキアクム対話編から始まりました。そのような自己省察の成果は、やがてヒッポ・レギウスの司教に就任して数年後の400年ごろに書かれた『告白』で大きな実を結ぶこととなります。カッシキアクム対話編と『告白』を結んで、彼の自己省察の思索のあとを辿ってみたいと思います。

カッシキアクム対話篇の一つ、『秩序論』 *De ordine* の中で、彼は次のように述べています。「哲学の課題は二つである。一つは魂について、他は神についてである。前者は、われわれにわれわれ自身を認識させ、後者はわれわれの根源を認識させる」(引用資料1)。

同じ時期に書かれた『ソリロキア』 *Soliloquia* でも、「わたしは神と魂について知りたい。それ以外には何もない」と断言しています(引用資料2)。

---

\* 本稿は2009年5月13日に行われた国際基督教大学キリスト教と文化研究所主催の連続講演会「『人間に固有なもの』とは何か」第12回、「自己を知る——超越者との対話」の講演原稿である。

自分とは何者なのかを徹底的に知りたい、しかし自己の根源である神を知ることなくしては、自己を正しく知ることはできない、だから自己と自己の根源である神について知りたい、アウグスティヌスのこの問題意識は終生変わらなかったし、自己省察に徹底的に集中するところに彼の思索の特徴があるように思います。このような問題意識はどこから来るのでしょうか。一般に自己省察と言えば他との関わりを一切遮断してひたすら自己の内面に沈潜することが考えられますが、彼の場合はそうではありません。彼は神との対話によってそれを行おうとしています。キリスト教徒だから神がどこにでも顔を出すのは当たり前という簡単な問題でもないように思います。彼は、自己とは何かを考えるに当たって、自己の内面にある影あるいは闇のようなものをつねに予感していたのではないか、そのために彼の自己理解には神との対話が不可欠であった、というのがわたしの解釈です。神との対話、超越者への眼差しが、そのような視点を持たない自己省察に比べて、彼の思索をより深いものに行っているのではないかと思います。以下、それについて少しお話ししたいと思います。

## 神を知る

自己とは何かを知るためには、自己の存在の根源を知らなければならない。その根源をアウグスティヌスは神と呼びます。しかし、神とは何かについて、彼は神にふさわしいと考えられる属性を並べ立てる、通常の理解の仕方を拒否します。神は至高、至善、全能にして、万物の創造主である。すべてのものは、この神を根源として、この神によって存在する。確かに、その通りに違いありません。しかし、神についてそのようなことを知ったり語ったりしたとして、いったいそれに何の意味があるのだろうか、と彼は反問します。

彼は、『告白』第1巻第4章で、言葉を尽くして神について語ったあとで、そうした自分の語る言葉の虚しさに気づいて、次のように叫んでいま

す。「いったい、わたしは何を語ってきたのでしょうか。わが神、わが生命、わが聖なる甘美よ。あなたについて語る時、人はいったい何を語っているのでしょうか」(引用資料3)。どんなに言葉を尽くして神を説明しても、それで神がわかるわけではない、神について語る言葉は虚しい。彼はさらに、「しかし、饒舌は無言に等しいからといって、あなたについて沈黙してしまう人々はわざわざいす」(同上)と続けて、神についてそのような仕方でも語ることの虚しさを知りつつ、なおかつ神について沈黙することを許さない促しがあることを明らかにしています。神を知り、神について語ることが、自己とは何かという根源的な問いの解明にとって、不可欠だからです。神について知り、語ることをやめるわけにはいかないのです。神について語ることをやめるというのは、自己とは何かという問いを放棄することになるからです。それでは、どのような仕方でもそれは可能になるのでしょうか。神は自己の根源であるに違いないとしても、それはどのような意味においてでしょうか。アウグスティヌスの場合、その問題は、どのような知り方で神を知ったら、自己とは何かが見えてくるかということになります。

第10巻冒頭は、「わたしを知りたいもう者よ、汝を知らしめたまえ。わたしが汝に知られているごとく、汝を知らしめたまえ」という、祈りから始まっています。この祈りは、神を知りたいと願う、いわば切実な叫びです。どのように神を知りたいのか。わたしが神に知られているように、です。神の知は完全である。そのように自分もまた神を知りたい、ということです。第1巻第5章で、彼は次のように述べています。

「あなたはわたしにとって何者にましますか。わたしをあわれみ、語らしめたまえ。あなたはわたしに、あなたを愛するように命じられ、そうしなければ、わたしに向かって怒りを発し、大いなるわざわざいをもっておびやかされますが、いったいこのわたしは、あなたにとって何者なのか」(引用資料4)。

神について知る、あるいは語ること、そのことが神を相手として行われ

る。つまり神を3人称として語るのではなく、2人称として語らなければならぬ。論理的には不条理に見えるこの営みに、彼の思索の特徴があるように思います。彼は、神に向かって、神が何者であるかを問いかけます。すなわち、神を第3人称として、それが何であるかを問うのではなくて、神との対話関係の中で、その関係が愛という人格的な関係に高められて行くような仕方、その神が何者であるかを問うということです。神は既にわたしに人格的な関係を求める何者かとして存在しています。しかし、わたしはその神を見出していません。神がわたしにとっての神であるという関係の中で、神とは何者であるかが問われるのです。

したがって、この問いを意味のある問いとして成立させるためには、神とは何者かを問うことにおいて、いかなる関係の中で、いかなる者としてわたしがそれを問うかという、問う者の態勢が問題になってきます。そのような事態の中でこの問いを担い続けることによって、問う者と問われる者との関係がより人格的な関係に高められ、この問いに意味が与えられるのです。愛という人格的な関係の中ではじめて、神を問い求めることができるのです。愛というのは、最も親密な人格関係を意味します。ここに、この問いの特殊性があります。いかなる関係も取り結ぶことなしに、神を問うことはできないのです。この愛の関係が自己とは何かを問うことを可能にしてくれるのです。

神は何者であるかと問いかけることによって、まさに自己自身のありようが問題になってきます。神を問い求めながら、彼が自分自身について赤裸々に語らざるを得ないのは、そのためです。自らを神に向かって開かないかぎり、神は見出されないからです。これが告白という仕方、神と対話することの意味だと思えます。

## 光と闇

「告白する」 *confiteri* というのは、一般には「ものごとをあるがままに

認めて、これを言葉によって表明すること」と定義されます。「ものごとをあるがままに認める」とは、事実を事実として承認することにはほかなりません。しかし、いささかの翳りもごまかしもなく、真を真としてあるがままに認めること、これ以上に困難なことはないのです。それは、人間の認識能力が不足しているからではなく、この平凡に見える一つの行為が、まさに人間の光と闇を徹底的に露わにするからです。そこで、アウグスティヌスは次のように言います。

「まことに、あなたは真理を愛されました。真理を行なう者は光に来るからです」(引用資料5)。

しかし、悪を行なっている者はみな光を憎み、その行ないが明るみに出されるのを恐れて、光に来ようとしません。すべてのものが光の下にさらされ、善と悪とが紛うかたなく露わにされます。彼が神に向かって、告白という仕方で自分自身について語るのは、告白を聞く相手が、そのような告白を真に受けとめることのできる者だからです。自己を知り、自己が神にふさわしいものに変えられることこそ、彼の希望であり、そのために彼は語るのです(『告白』10.1.1)。神に向かって自分のことを語るというのは、世に来てすべての人を照らす、まことの光(ヨハネ1:9)に照らされ、促されつつ、そこに否応もなくくっきりと浮かび出る自分の姿をありのままに認め、凝視することです。したがって、「告白する」とは、思いつくままに自分の善行・悪行を語るのではなく、神の前で明らかにされる自己を自己として認め、それを引き受けること、自己が何者であるかを神から聞くことにはほかなりません。そのような告白の営みによって、神を知ることが求められるのです。

自分が神に知られているように、自分も神を知りたい、と彼は言います。神はわたしのことを完全に知っておられるので、同じようにわたしもまた神のことを完全に知りたい、と言うのです。

「たしかに、主よ、あなたの目の前では、人間の意識の深淵も裸であるので、わたしがあなたに告白しようと思わなくても、あなたにとっていっ

たい何か隠れたものがわたしの内にあるでしょうか。じっさい、あなたをわたしに隠すことはできても、わたしをあなたに隠すことはできないからです」(『告白』10.2.2)。

そのようにすべてを知り尽くしている神に向かって、彼は自分の善と悪とをあらいざらい語ろうとします。あたかも神は何も見えていないかのように、神を無視して、自分に都合のよいことだけに目を向けて、自己とは何かを問うのではなく、自分には見えていない真実を見ている神から何を聞かされようとも、それを自分のものとして受け入れる、そのような仕方、自己とは何かを問うのです。それこそは、真理を愛する神に向かって、自らも真理を行なうことにほかなりません。

だが、われわれは、神に向かって告白するために、自分自身のことはすべて自分でよく知っていると言えるでしょうか。それは、忘れてしまっただけでよく覚えていないこと、気づかずに見過ごしてしまったことがたくさんあるという、単純な事柄ではありません。自分にはわかっているけれども他人には知られていない、ということもあります。あるいは、他人に言われてはじめて自分の欠点に気づくこともあるでしょう。しかし、相手の権威を信用しないかぎり、われわれはそれを否定することもできます。それでは、われわれはほんとうに自分自身のことをすべてよく知っているのでしょうか。自分のことは自分がいちばんよく知っていると言えるでしょうか。

「まことに、主よ、あなたはわたしを裁かれます。『人間の内にいることからは、その人の内にある、人間の霊以外には誰も知らない』としても、その人間の内にいる霊ですら知らない何かが、人間にはあるからです。しかし、主よ、あなたはご自分のお造りになった人間の内にいるすべてのことを知っておられます」(『告白』10.5.7)。

人間は、自分で自分を完全に知ることはできないのです。たしかに、日常の経験においても、他人との接触を通じて、今まで自分でも気づかなかったものが自分の内にあることを知って、驚くことがあります。しかし、もしそれが恥ずかしく、自分に都合の悪いものであれば、それを隠し

通すこともできるし、場合によっては否定することもできるでしょう。しかし、自分でも知らないことをすべて知っておられる神の前では、それは不可能です。自分にとって都合の良いところだけを選び出して告白することはできないのです。思い出したくないこと、隠しておきたいことも、ありのままに語らなければならない、というだけではありません。どのように誠意を尽くして、これが自分のすべてであると思って、自分について知り得る限りのことを洗いざらいさらけ出しても、じつは自分でも知らないことがまだ自分の内には隠されているのです。われわれは、自分が何者であるかということ、自分でさえ知らないのです。

### ありのままの自己

神の前で自分について語るとは、じつは自分が何者であるかを神から聞かされることなのです。「あなたから自分自身について聞くとは、自己を認識すること以外のいったい何でしょうか」（『告白』10.3.3）。神から聞く以外に、われわれが自己について知る道はないのです。そして、神から聞くためには、神に向かって自己を開かなければならない。自己を開くことなしには、神から聞くことはできません。神の前で自己について語る告白は、けっして独語ではなく、神から聞くために神に向かって自己を開く、神との対話の営みです。そのような対話は、それを促す神との出会いを通じて初めて可能になります。なぜなら、自分でさえ知らない自己を、われわれはどうやって開くことができるでしょうか。神がまずわれわれに迫って、われわれに告白を求めるのです。それが神からの呼びかけとしての不安です。われわれが自分自身のことを知らず、神からそれを聞くということは、われわれの自己認識には限界があるので、神から教えてもらわなければならない、という単純な事柄ではありません。それは、われわれが自己とは何かを問いつつ、その問いに直面することをむしろ避けようとしている、すなわち、われわれが自己を直視するのを妨げる何かがわれわれ自

身の内にあるという、深刻な事態を示しているのです。われわれが自己を直視できないという問題性こそ、われわれの闇にほかなりません。告白するという営みは、そのような自己の問題性を自覚することを含んでいます。したがって、われわれは神から促され、神の前で告白する以外には、自己を知ることはできないのです。このように、神を呼び求めることと、自己を知ることとが一つの営みになっているところに、他のいわゆる告白文学とはまったく異なる、アウグスティヌスの『告白』の独自の世界があります。

「じっさい、わたしが自分について知っていることも、あなたがわたしを照らされるから知るのであり、自分について知らないことは、あなたの御顔の前で、わたしの闇が真昼のようになるまで、知らないからです」(引用資料7)。

われわれにとって未知であるものが、やがて探究の結果明らかになる、ということではありません。神の前で告白することにより、自分について自分が何を知り、何を知らないかが明らかにされます。それは、われわれの光と闇を露わにするのです。真理を行なう者は、光に来る。その光に照らされ、かつて闇であったものが光となると、「鏡をとおしておぼろに」見ていたものを、「顔と顔を合わせて」見ることができるようになる。われわれが闇である限り、われわれは自分自身についても、神についても知ることはできません。神の前で告白することにより、われわれの闇が光に変えられて行かねばならない。告白は、神と語りつつ、神認識と自己認識を深めて行く、そのような神との対話の営みであり、それによって自己が闇から光へと変えられて行く、自己変革の道程でもあります。

#### 引用資料

- (1) *De ordine* 2. 18. 47. Cuius(=philosophiae) duplex quaestio est: una de anima, altera de Deo. Prima efficit ut nosmetipsos noverimus, altera, ut originem nostram.

- (2) *Soliloquia* 2. 7. R. - Quid ergo scire vis?  
A. - Haec ipsa omnia quae oravi.  
R. - Breviter ea collige.  
A. - Deum et animam scire cupio.  
R. - Nihilne plus?  
A. - Nihil omnino.
- (3) *Conf.* 1. 4. 4. Quid es ergo Deus meus? Quid, rogo, nisi Dominus Deus? Quis enim Dominus praeter Dominum? Aut quis Deus praeter Deum nostrum? Summe, optime, potentissime, omnipotentissime, misericordissime et iustissime, secretissime et praesentissime, pulcherrime et fortissime, stabilis et incomprehensibilis, immutabilis, mutans omnia, numquam novus, numquam uetus, innovans omnia, et in uetustatem perducens superbos et nesciunt ; semper agens, semper quietus, colligens et non egens, portans et implens et protegens, creans et nutriendus et perficiens, quaerens, cum nihil desit tibi. Amas nec aestuas, zelus et securus es, paenitet te et non doles, irasceris et tranquillus es, opera mutas nec mutas consilium; recipis quod invenis et numquam amisisti; numquam inops et gaudes lucris, numquam avarus et usuras exigis. Supererogatur tibi ut debeas, et quis habet quidquam non tuum? Reddis debita nulli debens, donas debita nihil perdens. Et quid diximus, Deus meus, uita mea, dulcedo mea sancta, aut quid dicit aliquis, cum de te dicit? Et vae tacentibus de te, quoniam loquaces muti sunt.
- (4) *Conf.* 1. 5. 5. Quis mihi dabit adquiescere in te? Quis dabit mihi, ut venias in cor meum et inebries illud, ut obliviscar mala mea et unum bonum meum amplectar, te? Quid mihi es? Miserere, ut loquar. Quid tibi sum ipse, ut amari te iubeas a me et, nisi faciam, irasceris mihi et mineris ingentes miserias?

- (5) *Conf. 10. 1. 1.* Cognoscam te, cognitor meus, cognoscam sicut et cognitus sum... Ecce enim veritatem dilexisti, quoniam qui facit eam, venit ad lucem. Volo eam facere in corde meo coram te in confessione, in stilo autem meo coram multis testibus.
- (6) *Conf. 10. 2. 2.* Et tibi quidem, domine, cuius oculis nuda est abyssus humanae conscientiae, quid occultum esset in me, etiamsi nollem confiteri tibi? Te enim mihi absconderem, non me tibi...
- (7) *Conf. 10. 5. 7.* Tu enim, domine, diiudicas me, quia etsi nemo scit hominum quae sunt hominis, nisi spiritus hominis qui in ipso est, tamen est aliquid hominis quod nec ipse scit spiritus hominis qui in ipso est. Tu autem, domine, scis eius omnia, quia fecisti eum. Ego vero quamvis prae tuo conspectu me despiciam et aestimem me terram et cinerem, tamen aliquid de te scio quod de me nescio... Confitear ergo quid de me sciam, confitear et quid de me nesciam, quoniam et quod de me scio, te mihi lucente scio, et quod de me nescio, tamdiu nescio, donec fiant tenebrae meae sicut meridies in vultu tuo.